

# 大津 歴博 だより

2005  
No.61

## 開館15周年記念シンポジウム 「地域と博物館」



10月29日(土)に歴史博物館講堂で開催



大津市歴史博物館

## 開館十五周年記念シンポジウム

### 「地域と博物館」

概要報告(抄)

大津市歴史博物館は、平成二年(一九九〇)一月二十八日に開館しました。それから十五年を経過した本年一〇月二十九日(土)、「地域と博物館」をテーマに記念シンポジウムを開催しました。講師に木村至宏氏(成安造形大学学長・大津市歴史博物館顧問)と上原恵美氏(京都橘大学教授・滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長)をお招きし、各二〇分の基調講演ならびに討論を行いました。その詳細についてはいずれ活字化することとし、今回「歴博だより」に、その概要を紹介することになりました。

#### 基調講演1

木村至宏氏

#### 市史編さんから歴史博物館へ

収集資料の保存と活用

大津市では明治時代から歴史の足跡を将来に伝えようとする機運があり、明治四四年(一九一一)、昭和十七年(一九四二)、同三十七年、同五一年と、市史の編さんがなされましたが、私は、その三十七年の市史編さんに関わり、大津の町を初めて歩きました。

そして市制八〇周年を機に、昭和五一年『新修

大津市史』の編さんが始まりました。その頃は高度経済成長の後、市民生活が大きく変貌を遂げていた時期で、資料の散逸が激しかった時です。このままでいくと、先人たちがどのような歴史をつくってきたのか、あるいは歴史とどのような対峙してきたのか、それを示すものがなくなっていくのではないかと、という一つの危機感がありました。

そこで、市史編さん室の少ない人員でしたが、ローラー作戦で、各学区ごとに教えてもらいながら、市民の協力によって資料の収集を行いました。また当時は埋蔵文化財の発掘調査が盛んに行われ、長らく謎の都とされた近江大津宮の所在地が判明するなど考古学の成果が著しい進歩を遂げたこと、また昭和四二年に大津市と瀬田・堅田両町が合併したこと、これらを契機に、最新の学問の成果を編さんすべきではないか、ということでも『新修大

津市史』の編さん事業が始まりました。

資料収集調査件数七五六件、撮影した資料のフィルムコマ数五万八千コマ、編さん室に寄せられた資料は約四千点を超えました。ではこれらの重要な資料をどうしていくのか、今後どのように保管し活用していくのか。ちょうど市史の編さん(全一〇巻)が完結した六三年に、博物館建設室が設置され、博物館が具体的にスタートしました。

博物館建設に際して、大津市は全国に先駆けて違う方法をとりました。従来は建物を建ててから常設展示を考えていましたが、本市では最初に、どのような常設展示にするかを協議してから、展示構想審査を行い、建物の構造を決めていきました。そして市民から寄せられた資料を中心に、大津の歴史と文化を常設展示のメインに据え、博物館は開館しました。しかし資料というものは自動的に散逸していく。それらを防ぎながら、市民の協力のもとに博物館が発展していくことを念じております。

#### 基調講演2

上原恵美氏

#### 文化活動の拠点づくり

県立図書館・琵琶湖博物館・びわ湖ホール  
私が昭和五四年(一九七九)に滋賀県の文化振興課で仕事を始めた頃、関係者は、滋賀は「文化不毛の地」、「文化果つる地」と自虐的に言われ



木村先生





上原先生

ておりました。昭和五一年に初めて滋賀に赴任してみると滋賀県の文化の深さにほとほと感じいていた私は、「文化不毛の地」ではないと思えました。しかし仕事をやってみてなるほどな思いました。というのは、滋賀県には都市的文化施設が皆無だったのです。図書館も無い。大きな本屋さんも少ない。映画館も美術館も大学も無い。ホテルも無かった。そういった状況が大きく変わったのが、昭和五五年以降であったと思います。

滋賀県では昭和四七年に「文化の幹線計画」が策定されました。それは、文化芸術会館・図書館・美術館・博物館・文化会館などを整備するという構想でした。今では市町村立も民間でも良い施設ができてきました。この二五年間になんと滋賀県は変わってきたんでしょう。今滋賀県では「装置」は整ったと思います。現在の課題は財政難や合併問題。たとえば合併によって、一つの市の中にこれまで独自

ですばらしい活動をしてきた図書館が複数存在することになります。合併したからダメになったりしないでほしい。旧町の固有名詞を持っている文化施設は、その町の人達の心のよりどころなんです。

それに加えて公の施設への指定管理者制度導入の問題。すべてが改悪とは言わないが文化施設にとっては改悪としか言えない。建物が建ち、中身が動きはじめるという時期に、もともとどういう役割を果たすものだったのかをあまり考慮しないような制度改変は改悪ではないかと思っています。次の世代に何を残していくのか、今の私たちだけが良ければいいという時代ではないと思います。

### 討論

**松浦(館長)** お二人の先生方が文化事業に関わられたこの四半世紀の間に、県民や市民の、文化や文化施設への意識は変わったんでしょうか。

**木村** 十五年前、博物館が開館した時は多くの市民が興味をもたれ大変賑わいました。でも一度見たらいいんじゃないか。市民の方の文化への意欲が次第に高くなってくると、そういう方にきちつと答えていくために、博物館がどう対応していくべきかが大事だと思いますね。

**上原** 私は県民や市民が文化施設に求めるものは変わっていないと思います。大津市歴史博物館に

は、大津の歴史という素晴らしいバックグラウンドがある。大津でないとできないものがたくさんある。滋賀県立近代美術館は小倉遊亀さんの作品が一つの柱ですが、新しい時代の風を感じる作品(現代美術)がもう一つの柱になっています。歴史博物館と違った意味で、現代の息吹を感じられる場所としての役割でしょう。それが新しくできる施設の使命だと思います。

**松浦** 大津の恵まれた歴史を地道に掘り起こし展覧会で皆さんに還元するのも使命ですが、それが入館者増にはつながらないという悩みがある。その点に何かご意見は。

**木村** 博物館はいまだに「古い」というイメージを払拭できない。ある会議で講師のアンケートをとるとすぐにマスコミで有名な人達があがる。しかし地道に活動していくことが大事で、博物館はお金儲けしたらダメ。社会教育施設なんです。市民のニーズは多様です。それに視線を合わせることで、そのなかで博物館の活動の考え方として、一つは地域中心に掘り起こしていくこと、二つめは、予算に余裕ができれば、普通では見られないようなものを展示できれば博物館での出会いの機会が作れる。それも大切なことです。

**上原** まったく同じですね。びわ湖ホールでも野村万斎さんとか指揮者の小澤征爾さんとかが来る

と即完売。でも残念さがある。皆が力を合わせて地道につくってきたものが認められない。しかし、オペラの世界ではそういう活動を継続するびわ湖ホールは大変評価されている。レベルを落とすのは反対です。

**松浦** 最後に、歴史博物館は今後どういう役割を果たしたらいいのか。一言ずつお願いします。

**上原** 木村先生が言われたように、行きたいけれども行けないようなものを持ってきて展覧会をするのも大きな役割と思います。それに市民の人達とどのように関わるのか。土曜講座やワークショップは非常に密な関わり方です。大津の博物館が無くなったら困るとか、ハードコアなファン、サポーターの人達には是非、力になっていただきたい。山崎正和先生が「その土地の文化や芸術を創造するのはそこに住む一般の人達の受容能力である」と言われています。一級の文化人である芭蕉を受け入れたように、近江にはそういうキャパシティがある。それをどうやって今の時代に呼び起こすかが文化施設に与えられた使命だと思います。

**木村** 博物館がどのようなメニューを作れば市民の方が食べていただけるのか。私は企画展も大事だと思いますが、まだまだ市域に眠っている資料に、いかに光をあてるか、この土地を奥つ城の地と考えられている市民の方々に、大津、滋賀県の

素晴らしさを知ってもらうことが博物館の役割だと思えます。

**松浦** ありがとうございます。今日ご参加いただいている皆様にも協力していただきながら、今後、性根をすえて新しい博物館をつくっていききたいと思えます。

## 第52回 ミニ企画展

### 瓦でたどる大津の歴史

■平成18年1月6日(金)～3月12日(日)

我が国における瓦の使用は、五八八年の飛鳥寺創建時に始まります。このとき、百濟から四人の瓦博士が来朝し、瓦づくりを伝えたのです。この瓦は以後、さまざまにその意匠が凝らされてきました。古代では、巨大な寺院の礎に葺かれた蓮華文の軒丸瓦が多数遺されています。この瓦の図柄は、浄土に咲くという蓮の花を上から見た文様になっていますが、いずれも似ているようで、細かいところに時代の変遷が伺えます。また市内の南滋賀庵寺周辺でしか見られない方形軒先瓦は、普通と違い蓮の花を縦割りにした文様で、全国的にみても非常に珍しいものです。

次いで、浜大津からは中世、それも鎌倉時代と考えられる、小型の蓮華文軒丸瓦が出土していますが、大津市域ではこの時代の遺存例は少なく、当時の状

況はほとんどわかっていません。

市内では、大津城の金箔瓦が、近世の幕開けを告げるものです。金箔瓦は当時、権威の象徴として利用されていました。大津城は現浜大津の湖岸に四層の天守閣を持った豊臣政権下の城郭で、関が原の戦いで廃城となっています。江戸時代になると、松本村瓦師の名前や製作年を施した、意匠を凝らした鬼瓦が数多く見られるようになります。さらにこの時代、全国の町家に急激な広がりを見せた棧瓦も、実は、園城寺(三井寺)万徳院で葺かれたのが最初とされています。また、膳所藩主本多家の家紋である立葵紋の軒丸瓦や、膳所城の二角を飾った大きな鯰瓦も見応えのあるものです。

本展では、古代の瓦から、近代の小学校の鬼瓦まで、さまざまな瓦を展示し、瓦の変遷と、大津の歩みを振り返ります。



旧膳所城鯰瓦



下阪本六丁目若宮神社で、天正一五年の銘が刻まれた太鼓が所蔵されていることが分かりました。この太鼓は、日吉大社の山王祭の船渡御で利用されていたもので、これほど古い年号を刻む祭礼の太鼓が残されていることは、稀なことです。また天正一五年は、織田信長の山門焼き打ちによって焼失した日吉社が復興を遂げる時期に当り、社殿の再興と共に祭礼も復興していた様子を物語る資料としても貴重であります。

見つかった太鼓は、巾六三センチ、径六〇・八センチで、普段目にする祭りの太鼓に比べると胴の膨らみが少なく、スマートな外見を持っています。胴の上部に二ヶ所鑲取り付けられており、棒を横に渡し、担ぎながら叩くことができるようになっています。この鑲の付近に「天正十五年卯月一日」「奉寄進」「日吉二宮太鼓」の銘が刻ま

れており、天正一五年に奉納されたことがわかります。皮の一部は破れており、そこから胴内をうかがうと、「天和三年癸亥歲」(一六八三)と「宝曆四甲戌」(一七五四)の墨書が確認され、二度皮の張り替えが行われたことが確認できました。

現在は、若宮神社の春祭(五月三日)に境内へ

出されるのみで、皮が破れているため太鼓としての機能を果たしていませんが、かつては山王祭の船渡御の時に利用されました。四月一日申の神事で、西本宮を出御した七社の神輿は、下阪本の七本柳から神輿船に安置され、唐崎沖へ向かいます。以前は丸子船二艘に板を渡し、神輿を安置していました。そしてこの太鼓は、大宮(現西本宮)を載せた船の舳先に、竹を組んで置かれていたといえます。神輿船は、唐崎沖で粟津御供を供えられ、その後若宮神社のある比叡辻に向けて渡御。唐崎から比叡辻まで神輿船の競争となるのですが、そのスタートの合図は、この太鼓を打つことでした。このため「大宮太鼓」と呼ばれています。

次に天正一五年という年代について触れておくと、元龜二年(一五七二)、織田信長の山門焼き打ちによって日吉社は灰燼に帰し、その復興は、織田信長の死後、豊臣秀吉の時期になって本格的となりました。比叡山、日吉社ともに復興がはじまり、日吉社については祝部行丸(正源寺行丸とも)が尽力し、南光坊祐能などが努力しました。

天正一一年(一五八三)には、日吉社境内の清祇

が行われ、七社の仮殿が設けられます。その年の山王祭は、駕与丁の事情などで大神のみの渡御だったと記録されており、焼き打ちの痛手が癒えていない状況でした。天正一三年(一五八五)には大宮立柱が行われ、翌天正一四年には大宮正遷宮が行われています。日吉社の復興がようやく軌道に乗ってきた時期といえます。そのような時期にこの太鼓は寄進されており、まさに社殿の復興とともに祭礼の復活も進んでいたことを物語る太鼓ということが出来ます。(学芸員 和田光生)



太鼓(天正十五年銘) 若宮神社蔵

## 歴史博物館の教育普及活動について

歴史博物館の今年度の教育普及活動からふるさと大津歴史教室と撮影会イベントについて報告します。実物を見たり現地を訪れたりする体験は、活き活きた感動を与え、次の知識への原動力となります。歴史教室は、歴史の舞台となった史跡や寺社を訪れることにより、こうした体験の場を提供しようとするものです。本年度は次の四回を実施し、延べ一五九名が参加されました。

四月十六日「近江国府と瀬田唐橋」

五月十四日「膳所焼と蘆花浅水荘」

十一月五日「安土の町に戦国時代の面影を見る！」

十一月十二日「栗東の史跡と里内文庫」

「近江国府と瀬田唐橋」は、企画展「近江の国府と郡衙」に連動させ、史跡公園として整備が進む近江国庁跡をはじめ、国庁・国分寺関係史跡を見学しました。「膳所焼と蘆花浅水荘」では、長年にわたる修理工事が完了した国指定文化財蘆花浅水荘と膳所焼美術館を訪れました。また、十一月の二コースは、博物館同士の連携を深め、お互いを活用しようとする初めての企画です。訪問先で開催中の展覧会を見学し、展覧会に関係する史跡を訪れるという行程で実施し、参加者の方々の興味や理解もより深まったことと思います。

撮影会イベントは、夏休みに開催したミニ企画

展「山ノ神遺跡」

でのお盆期間中に「鴟尾と背くらべ」を、企画展「広瀬宰平と伊庭貞剛の軌跡」

開催中の土・日・祝日に「ミゼット消防車と撮影会」を実施し、

多くの方々が記念写真（無料）

をお持ち帰りになりました。イベントを通じて得られた博物館への親しみが、ゆくゆくは博物館への興味、歴史・文化に対する興味へとつながることを願っています。



ミゼット消防車と撮影会

## 中学生職場体験

毎年、中学生が職場体験学習で当館を訪れます。

以前は一校のみだったのですが、徐々に増え、本年度は、石山・北大路・打出・皇子山・唐崎の5校です。十月・十一月には石山・唐崎・北大路の三校が相次いで来館し、博物館の仕事を体験してもらいました。いつもは二日間の日程なのですが、キャリア・スタート・ウィーク職場体験（大津ワークわく体験）の学校は四日間、それが二校含まれており、より深く博物館を実感できたのではないかと思います。

どんな仕事をすれば博物館を実感してもらえるのか、受け入れる側としてもいろいろ考えました。博物館は、お客様を受け入れ大津の歴史に触れていたたく面と、資料を保管整理し後世に残す面があります。子どもたちにも受け付けに座ってもらい、来館者に対応する体験、そして資料整理に挑戦してもらいました。資料整理の作業は、膨大な絵葉書の整理です。単調な仕事でしたが、熱心に取り組んでくれ、おかげで、整理も進みました。子どもたちもほんものの資料に触れて、少しは歴史への興味を高めてくれたのでは。ただ、本格的な資料の整理になると、子どもたちには難しい面があり、今後どうしていくかは、大きな課題です。



中学生職場体験

大津歴博だより No.61  
平成17年12月28日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>

R100